

# 国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成25年度調査概要



平成 26 年 3 月  
一関市教育委員会

## はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。奥州藤原氏の時代から室町時代まで、中尊寺の荘園であったことが、古文書等によって証明されています。その歴史的な貴重性から、平成17年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定され、平成18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、平成24年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、拡張登録に向けて新たな一歩を踏み出したところがあります。

当市では、この骨寺村荘園遺跡の世界遺産登録に向けた調査研究に取り組んでおり、今年度は、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、不動窟、及び伝ミタケ堂跡の発掘調査を実施しています。

本書では、これらの調査成果をご紹介します。当市の文化財への興味と関心が高まることを期待しています。地域のルーツを解明することが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後になりますが、調査に際しては地権者をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

一関市教育委員会

教育長 藤堂隆則

### 例言

1. 本書は、平成25年度に一関市教育委員会（生涯学習文化課）が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です
2. 本書は、一関市教育委員会（生涯学習文化課）が執筆・編集しました
3. 出土した遺物は、一関市教育委員会が保管しています

【表紙】 梅木田遺跡調査区全景写真

平成12年度に調査した際、大型の柱穴が発見され、奥州藤原氏の時代の村の重要施設とも予想された遺跡です。今年度は、その建物の全容を明らかにするために再調査を実施し、さらに遺構群が延長する範囲を拡張して、発掘調査を実施しています。



## 中尊寺と骨寺村



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』（複製）原典は中尊寺蔵

平安時代末期、自在房蓮光<sup>じざいぼうれんこう</sup>という僧侶は藤原清衡<sup>ふじわらのきよひら</sup>の命令により紺紙金銀字一切経<sup>こんしきんぎんじいっさいきやう</sup>を完成させました。その功績により、中尊寺経蔵の別当<sup>べっとう</sup>（責任者）に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵に寄進<sup>きしん</sup>（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村は出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』<sup>むつのくにほねでらむらえず</sup> 2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、鎌倉時代後期に中尊寺と、奥州藤原氏の滅亡後にこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は農家や田圃、川や道路が詳らかに描かれており“詳細図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。山々の尾根線を挟み「寺領」と「郡方」と記されており、山々に囲まれた部分が“骨寺村”であったことが分かります。

また鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』<sup>あづまかがみ</sup>にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との合戦であった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮<sup>しんれん</sup>が頼朝に対し寺の領地を安堵（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝はその場で骨寺（東は鎰懸<sup>かぎかけ</sup>、西は山王窟<sup>さんのういわや</sup>、南は磐井川<sup>みたけどう</sup>、北は峰山堂<sup>まさか</sup>の馬坂）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の四至（村境）が、現在も地名や遺跡として残されています。

はくさんしゃ こまがたねじんじや  
白山社及び駒形根神社の調査（中川4・6地点）

平成24年度の現地踏査で、駒形根神社の北西約250mにある丘陵北側の山裾に、大規模な土地造成の痕跡を確認しました。その造成痕跡の範囲や年代を解明するために、今年度は最も大きな平場の発掘調査を実施しました。

平場は南北約20m×東西15mの範囲で、南側は山裾を段切り状にカットしており、拳大の礫と黒色土を交互に積み上げて造成されていることが判明し、その裾では土留めの石を発見し、造成の範囲が明らかになりました。また、造成は少なくとも2時期以上がなされていたことが判明し、新しい時期のものは17世紀以降のものであることが想定されましたが、古い造成の時期は未詳です。

平場の上面からは、7基の柱穴が発見され、3間以上の掘立柱建物が存在していたことがわかりました。また、付近には建物の礎石とみられる石材があります。その内の一つは当初、原位置を保っていると考えていましたが、礎石上面と平場最奥部の比高差が6cmしかなく、後世に移動された可能性もあります。

この平場の北側に池状の窪地が確認され、部分的な発掘調査を行ったところ、窪地底面には粘土が貼られており、また池の汀（縁）には石が並べて置かれており、人工物であることが明らかになりました。また窪地の周辺に柱穴を発見しています。

平場の東側（中川4地点）で、約30基の塚を発見しました。大きいものでは直径約4m、高さ約80cmです。測量を行った結果、配置に規則性は認められませんでした。この塚群の性格は未詳で、来年度以降の調査を予定しています。



調査区全景写真 平場の上面から柱穴や建物礎石が発見されました。





造成土の堆積状況  
礫と土を交互に積んでいます。



発見された掘立柱建物と想定規模  
7基の柱穴が発見されました。



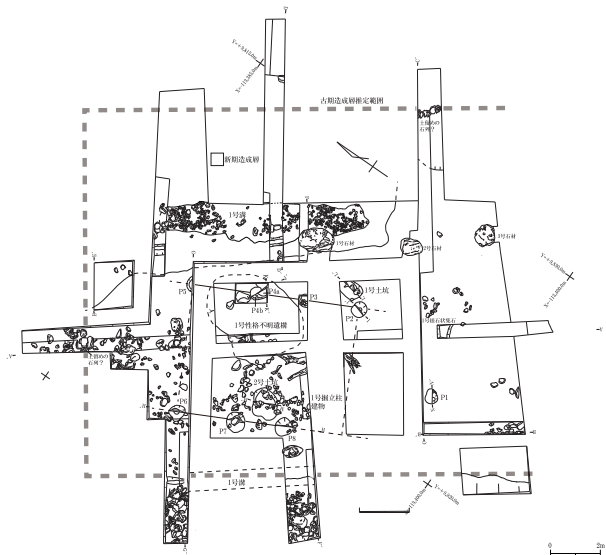
礎石と考えられる石材  
石材の下に安定させるための根石が確認できます。



塚 直径約4m、高さ約80cmです。  
来年度以降の調査を予定しています。



池状遺構  
手前が池内部で礫を混ぜた粘土が貼られています。  
汀（縁）に石が置かれていることがわかります。



中川6 地点全体平面図  
点線は造成の範囲です。その範囲内に建物礎石や掘立柱建物が発見されました。

## うめのきだいせき 梅木田遺跡の調査

平成25年度は約724㎡の調査を実施し、山裾をカットした段々の平場を造成して、下段に建物を構築していることが明らかになりました。上段からは建物遺構は発見されませんでした。下段の奥部には比較的大きな溝が掘り込まれており、雨水対策とともに土地を区切る施設と考えられます。また、部分的に整地されていることも明らかになりました（表紙写真）。

調査区南西側を覆う黒色の土は、自然流路（沢）の跡と考えられます。溝は、この沢に流れ込んでいます。この屋地の北東は山に、北西は沢に囲まれることが明らかになりました。

大型の柱穴は18基を確認し、少なくとも2棟以上の掘立柱建物になることが判明しました。この他にも多数の柱穴を発見しており、数時期にわたる遺跡変遷が示唆されます。

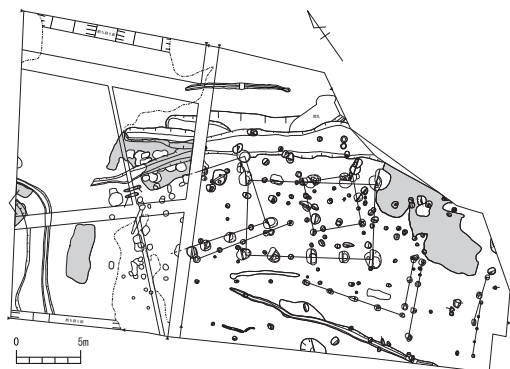
出土遺物は乏しいのですが、注目すべきは鎌倉時代中後期の龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗の破片が出土したことです。この青磁は、現在の中国浙江省付近で生産されたもので、当時の日本に輸入されていたものです。この遺物の年代は、絵図が描かれた時期と一致するもので、絵図の世界を証明する資料として注目されます。その他、用途不明の金属製品（鈴か）などが出土しています。



発見された大型柱穴  
直径約1m、深さ約1mもあります。



出土した龍泉窯系鎬蓮弁文碗  
約3cmと小片ですが、中世の骨寺村莊園遺跡を考えると貴重な遺物です。



梅木田遺跡全体平面図  
四角で囲った範囲が大型の掘立柱建物と推定されます。



龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の復原実測図  
鎌倉出土の遺物を参考に復原しました。



## 不動窟の調査

不動窟の調査では、窟前面の遺構の有無を確認するため、部分的な発掘調査を行っています。その結果、窟の前面西側に岩盤を穿った平場と3基の柱穴が発見されました。

これは平成23年度調査で確認された窟入口部の貫跡ぬきあとと関連する遺構と考えられ、窟入口部に庇ひさしや舞台などの何らかの施設があった可能性が示唆されます。



不動窟の前面で発見された柱穴

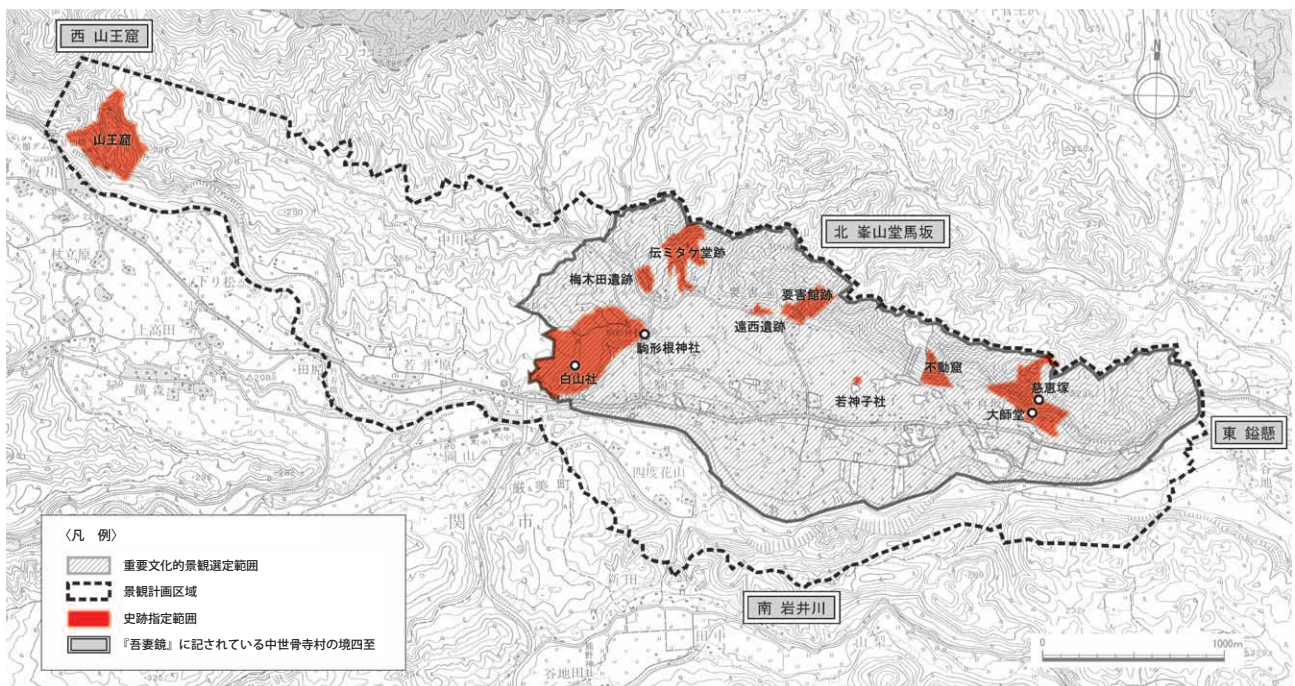
## 伝ミタケ堂跡の調査

伝ミタケ堂跡の調査では、広範囲に刈払いを実施し、通路と考えられた部分の発掘調査を行いました。遺構遺物ともに発見されませんでした。

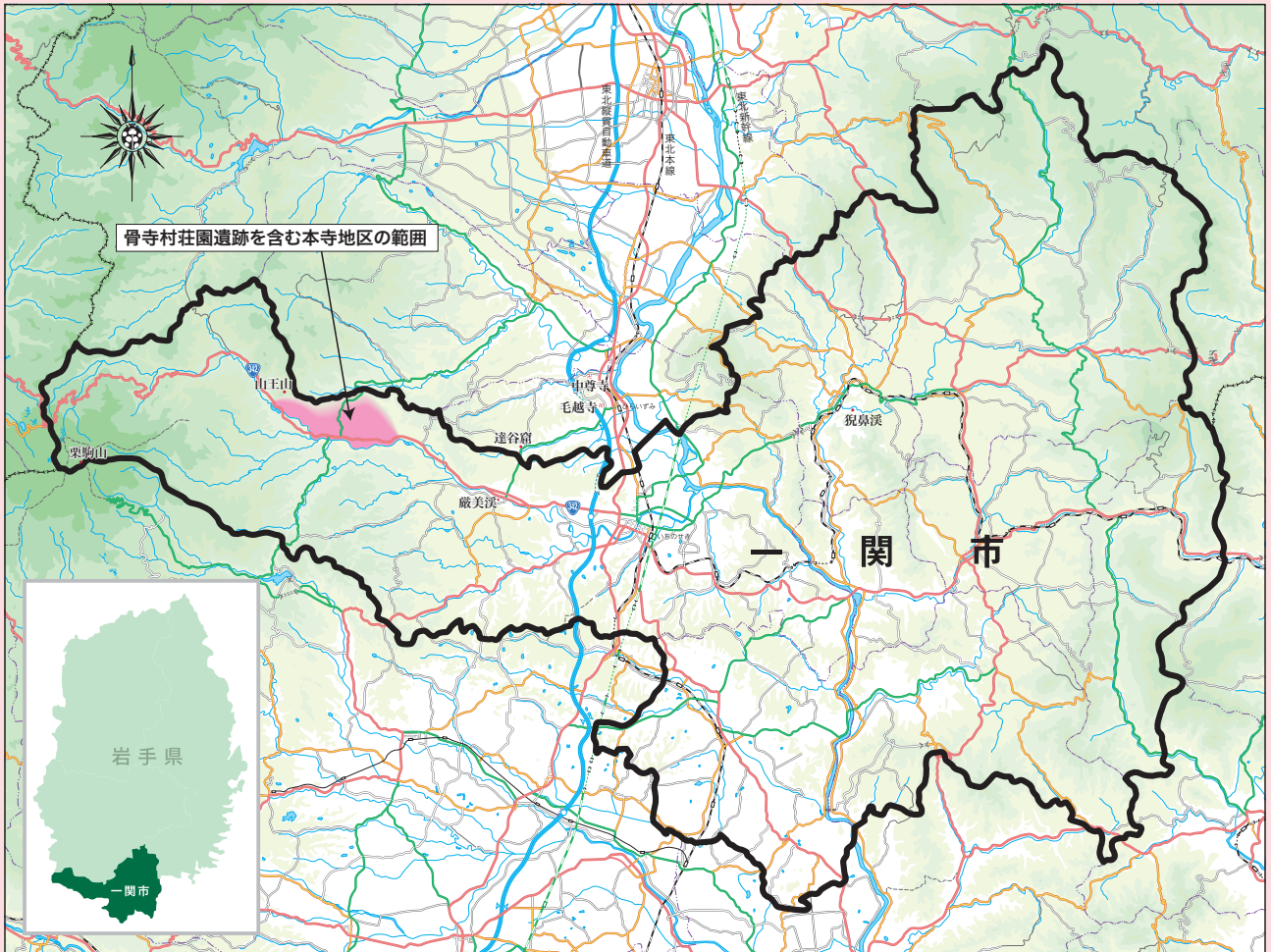
伝ミタケ堂跡では、2ヶ年の調査を実施しましたが、荘園時代に結びつく手がかりは得られていません。



伝ミタケ堂跡調査区全景写真



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村荘園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村荘園遺跡  
— 平成25年度調査概要 —

【編集・発行】 一関市教育委員会 生涯学習文化課  
岩手県一関市竹山町7-5

【印刷】 川嶋印刷株式会社  
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21  
平成26年3月